

10. 滋陰劑

陰虛証を治療する方劑である。

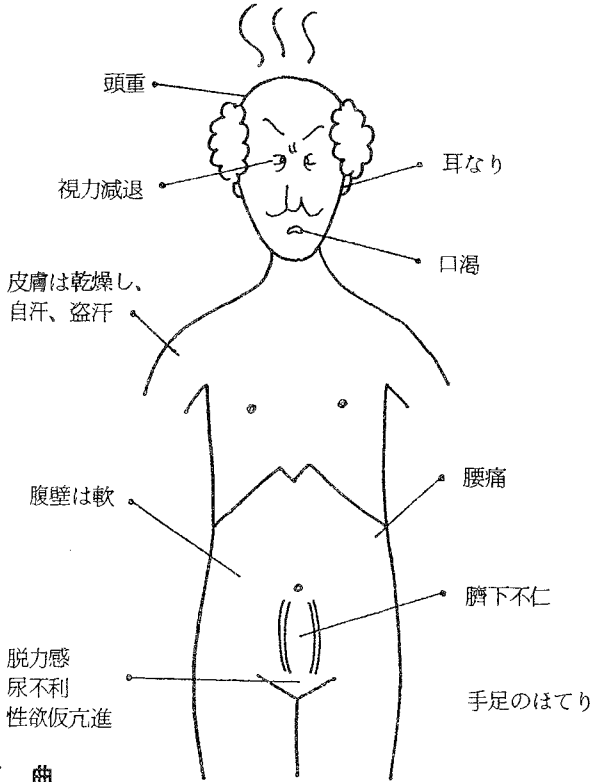
陰虛証とは、陰液全般の不足によるもので、血虚（栄養不足）と共に津液枯渇（脱水）を伴う。物質面の消耗とともに、代償性の異化亢進作用が起こり、却って熱証を呈する。これが虚熱である。

虚熱の程度が著明なものを陰虛火旺という。

陰虛証では、身体羸瘦して顔面は憔悴し、咽乾口燥、虚煩して眠れず、小便の色は赤く便秘する。舌質は紅く乾燥し、舌苔は少なく、脈は沈細で数となる。

六味地黄丸、滋陰降火湯、滋陰至宝湯、麦門冬湯、炙甘草湯、清暑益氣湯。

ろく 六 味 丸 (小児直訣)



方 意

八味丸より桂枝と附子を去った薬方で、腎陰虚を治す養陰の主方である。腎虚の症状と共に虚火上炎するため熱証、燥証（虚熱）を呈する。病位は少陰厥陰（腎肝）。脉は沈数或いは細数。舌は紅～暗紅で舌体乾燥、無苔か微白苔。

診断のポイント

- 易勞、頭重、耳鳴、腰からの下の脱力感
- 尿不利、便秘、盗汗
- 口渇、五心煩熱
- 虚熱の症状

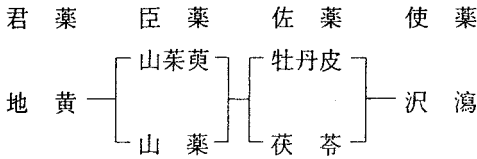
原 典

地黄丸、腎虚失音、齒開不合、神不足、目中白睛多ク、面色晄白等ノ証ヲ治ス。
（小児薬証直訣・卷下、諸方）

処 方

ジオウ（地黄）…………… 5.0g	ブクリョウ（茯苓）…………… 3.0g
サンシュユ（山茱萸）…………… 3.0g	ボタンピ（牡丹皮）…………… 3.0g
サンヤク（山薬）…………… 3.0g	タクシャ（沢瀉）…………… 3.0g

構成



註) 龔居中(紅垺点雪)は、君薬地黄、佐薬山茱萸山薬、使薬茯苓牡丹皮沢瀉としている。牡丹皮、茯苓、沢瀉の3薬が共に佐使薬とも考えられる。

方義

地黄(熟地)：甘微温。滋陰、補腎。腎精を生ずる。	} 三補
山 茱 萸：酸渋微温。収斂の性質があり、肝を温め、下焦をひきしめる。	
山 薬：甘平。補脾の要薬であると共に虚熱を清し腎を固める。	} 三瀉
牡 丹 皮：辛苦微寒。涼血作用、陰火を瀉す。	
茯 苓：甘平。利水作用。脾中の湿熱を滲泄して腎に通じさせる。	
沢 瀉：甘寒。下焦の水邪を逐う。諸薬を腎経に導く働きがある。	

本方は全体として肝腎不足し、真陰虧損し精血枯竭した状態に用いる方である。六味丸は陰虚陽盛の薬、八味丸は陽虚陰盛の薬である。

八 綱 分 類

裏 熱 虚 証

効 能

疲れやすくて尿量減少または多尿で、時に口渴があるものの次の諸症：
排尿困難、頻尿、むくみ、かゆみ。

類 方 鑑 別

八味地黄丸：腎陽虚の主方である。身体機能が低下して、特に下半身の冷え、脱力などが著しい。

桂枝加竜骨牡蠣湯：精力減退、遺尿など腎虚の症状と、不安、不眠などの精神神経症状が強い。虚熱の症状はない。小腹弦急と臍の上辺りの動悸をみとめる。気血不足と虚陽上浮。

五 苓 散：口渴、多汗、尿不利、時に悪心嘔吐(水逆)、表寒で内に蓄水。

猪 苓 湯：口渴、頻尿、残尿感、排尿痛、下焦で水熱が互いに結び陰液を傷けたもの。

清心蓮子飲：虚証。軽い排尿痛や残尿感などに加え、神経過敏症状。気陰両虚と心火旺。